

スポーツ教育モデルを適用した体育授業の検討
—技能下位児を対象にして—

順天堂大学大学院
スポーツ健康科学研究科
学籍番号：4119047
氏名：山本 龍平

【目的】

体育は、授業目標の1つに「学びに向かう力、人間性等」において社会的行動領域を設け、児童生徒の社会的行動の育成を担っている(梅垣ら,2016)。体育授業における社会的な態度の育成は、近年の学校教育問題である学級崩壊、不登校児童、いじめといった問題が関係している(大津ら,2010)。

そこで本研究では、小学校の体育授業において、スポーツ教育モデルを適用することで技能下位児の態度面、技能面にどのような学習成果がみられるのかを検証することを目的とする。

【方法】

小学校6年生を対象としたゴール型サッカーの10時間単元(実施は7時間)の授業を実施し、ボールを持たないときの動きの習得を目指した「フリーゾーンサッカー」を教材として扱った。本研究ではスポーツ教育モデルの特徴である6つのスポーツの特性(シーズン、チームへの所属、公式試合、クライマックスのイベント、記録の保持、祭典性)を取り入れた。本研究では、7時間単元のすべての授業に参加できた児童55人を分析対象とし、その内下位児は計6人であった。

データの分析の際には、下位児と下位児を除いた3クラスを対象とした。スポーツ教育モデルの学習成果を検証するため、態度面は、形成的授業評価、集団的・協力的活動の形成的授業評価、授業中の発語を分析し、技能面はメインゲーム(フリーゾーンサッカー)におけるパス技能、サポート行動の分析を行った。

【結果】

- 1) スポーツ教育モデルを適用することで、形成的授業評価は、下位児を除く全体及び下位児の両方で単元を通して高値で推移し、集団との関わりについても、下位児を除く全体及び下位児の両方で総合評価が高値で推移した。特に下位児は、「集団的活動への意欲」の次元で高い値を示したことから、仲間との活動に肯定的かつ意欲的に取り組んでいたことが示唆された。
- 2) 下位児を除く全体と下位児のパスの成功率は、単元前後において80%を超える比較的高い成功率であった。下位児においては、単元前後で総数は増加しており、ボールに積極的に触れる機会が増加していた。
- 3) 下位児を除く全体と下位児のサポート成功率、サポート成功率は80%以上と比較的高く、一定の学習ができていた。下位児においてはサポート行動自体が少なかったが、攻撃に有効なサポート行動を学習できた下位児もいた。
- 4) 下位児における発語は、単元はじめから終わりにかけて発語の回数が多くなったことから、仲間との関わりが増加していた。

【結論】

スポーツ教育モデルを適用した授業によって「チームへの所属」や「グッドスポーツマンになろう」等の特性を取り入れることで、下位児の行動特性における運動の難易度、学習集団に関する問題に対応し、態度面、技能面から解消できる可能性があることが示唆された。